

国際文化交流学科履修案内

(2014年度入学者から適用)

【国際文化交流学科の教育目標】

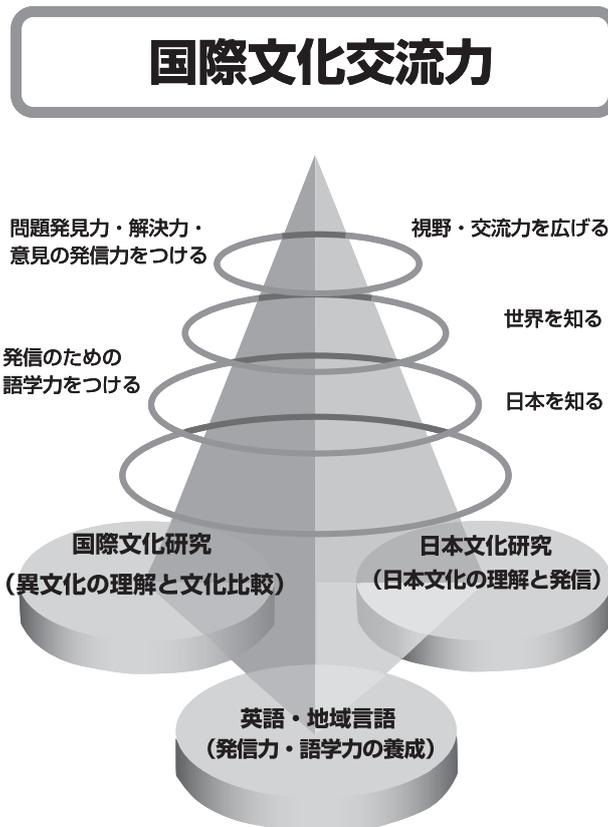
国際文化交流学科は、**異文化理解**、**日本文化発信**、**外国語**の三つの力を総合的に養成し、いわば**国際文化交流力**とでもいうべき力を身につけてもらうことを目標としている。この学科に入学したあなた方一人ひとりに、文化の異なる人たちと**共生しながら日本文化を発信**できる人になってもらいたいのである。

日本文化と他の諸文化との共通点・相違点を知り、文化の障壁を乗り越えながら、心を開いて異文化の人たちと**コミュニケーション**できる人。日本文化の重要な要素を見極め、それを外国語で**発信**できる人。そうして、平和な世界を築き人類の文化を豊かにすることに**貢献**できる人。そのような人を育てるのが国際文化交流学科の願いである。

【カリキュラムの概要と特色】

国際文化交流学科のカリキュラムは上述の教育目標を実現できるように組み立ててある。その構造を理解しながら科目を履修してほしい。

まずカリキュラム全体の構造に注目してみよう。国際文化交流学科の科目を大きく捉えれば、**国際文化研究・比較文化研究**、**日本文化研究**、**英語・地域言語**という三つの科目群が、三位一体として組み合わせられている。それぞれ、**異文化理解力**、**日本文化発信力**、**外国語力**を伸張させることを主眼とする科目群である。これら三群の総合により、あなた方一人ひとりが、**国際文化交流力**を身につけることになるのである。また、個々の科目は、1年次から4年次へ進むにつれて、**導入・展開・総合**という骨格に沿いながら配置されていて、無理なく力が養成されていくようになっている。



【専攻科目の履修要領】

以下の記述は、**教育課程表**を見ながら読んでほしい。なお、ここでは、それぞれの科目群の概略と注意事項だけを述べる。それぞれの科目の詳しい内容については**シラバス**を参照してほしい。

また、学科を卒業するための履修の仕方に関する重要事項は、教育課程表の次頁に**履修要件・進級要件・卒業要件**と

してまとめられているので、しっかり読んでもらいたい。

1. 専門基幹科目（必修）

専門基幹科目は、国際文化交流学科における学修の骨格をなす科目群であり、すべて**必修科目**である。必修科目とは、卒業するためには必ず履修しなければならない科目という意味である。

（1）文化交流入門（国際）（1年次・前学期）

これは、国際文化交流学科における学修への導入、ならびに専門展開科目のなかの**国際文化研究科目群・比較文化研究科目群**への導入となる科目である。

（2）文化交流入門（日本）（1年次・前学期）

専門展開科目のなかの**日本文化研究科目群・比較文化研究科目群**への導入をおこなう科目である。

（3）国際文化交流基礎演習（1年次・後学期）

演習形式で、国際文化交流学科における学修の基礎作りをする科目である。20名程度の少人数制で指導がなされる。なお、**演習**とは、少人数制で討論や履修者による研究発表などを中心にする科目であることを示している。

（4）国際文化交流専門演習ⅠA・B（2年次）

演習形式で教員の指導を受けながら、国際文化、日本文化および文化比較に関する研究を深めていく科目である。同時に、問題の発見能力や解決能力、意見の発信力も育てていくことになる。

（5）国際文化交流専門演習ⅡA・B（3年次）

演習形式で教員の指導を受けながら、国際文化、日本文化および文化比較に関して研究した事柄を総合するとともに、応用力を育てる科目である。

（6）英語（2～4年次）

共通科目の外国語科目としての英語（14単位必修）に加えて、さらに英語力を高めるために履修する科目群（4単位）である。

2. 専門展開科目（選択必修）

専門基幹科目を肉づけし、学修や研究の幅を広げ深化させる科目群であり、すべて**選択必修科目**である。選択必修科目とは、同一の選択必修科目群の中から授業科目を選択して履修し、卒業に必要な単位数を修得しなければならない科目という意味である。

（1）英語（2～4年次）

この科目群から10単位を選択して修得しなければならない。共通科目の外国語科目としての英語、および上述の専門基幹科目の英語と合わせて学修することにより、文化の発信と交流に不可欠な伝達手段を身につけてほしい。

（2）地域言語（1，2年次）

ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語のなかから一言語を選び、8単位修得しなければならない。英語圏以外では、現地の言語を知らなければ交流することができない場合が多いので、英語に加えて、しっかり学修してほしい。

日本語（1，2年次）は、外国人留学生、または帰国生徒などで日本語力が不足している者だけが履修できる科目である。

（3）日本文化研究科目群、国際文化研究科目群、比較文化研究科目群

日本文化研究科目群、国際文化研究科目群についてはそれぞれ5科目（10単位）以上、比較文化研究科目群については4科目（8単位）以上、3つの科目群を合わせて17科目（34単位）以上を修得しなければならない。そうすることによって、豊かな知識と偏りのない視野とを身に付けられるようになっている。

日本文化研究科目群（1～4年次）

国際的な文化交流には、日本文化を発信できる力が欠かせない。日本文化の多様な側面を深く学んで、明確に認識し、文化背景の異なる人に伝えられるようになってほしい。

国際文化研究科目群（1～4年次）

世界各地の文化と現状を幅広く学ぶための科目群である。文化の分野ごと、および世界の諸地域ごとに文化を概観する科目等がある。

比較文化研究科目群（1～4年次）

日本の文化とそれ以外の国際文化について深く学ぶだけでなく、それらを詳細に比較することによって、文化背景の異なる人と交流する際の問題点を認識するための科目群である。この科目群の学修を通して、人間社会における「文化」そのものの真の働きが見えてくるだろう。

3. 関連科目（選択）

多様な科目が開講されており、すべて、必修の縛りがなく自由に選択できる**選択科目**である。しかし、卒業のためには、関連科目全体のうち20単位以上を修得しなければならない。

（1）日本語教育研究科目群（2，3年次）

国際文化交流学科では、日本語教員養成課程（**資格教育課程参照**）の一部をなす科目群が、学科の卒業単位に算入可能な科目として開講されている。なお、日本語教員とは、外国人に日本語を教える先生を指している。

（2）知識や視野を広げる科目、実技・実践科目（選択。1～4年次）

現代人には必須の**情報処理**や、**広告文化論**などの知識・視野の拡大に役立つ科目、**出版編集実務論**や**フィールドワーク入門**のような実践科目が履修可能である。**イタリア語**も選択科目としてここに開講してある。

（3）地域言語特講 ・ （原則として3，4年次）

ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、韓国語、日本語、スペイン語に関して多様な講義が開講される。

（4）外国語学部ゼミナール ・ （2，3年次）

演習形式で、教員の指導を受けながら研究を深め、問題の発見能力や解決能力、意見の発信力を育ててゆく科目である。教員の研究分野にしたがい、多様なゼミナールが開講される。

（5）卒業研究（4年次）

3年次の**国際文化交流専門演習**、**外国語学部ゼミナール**、**地域言語特講Ⅰ**のいずれかの科目で指導を受けた教員が開講する**卒業研究**を選択して履修する。演習形式で、教員の指導を受けながら卒業論文を執筆し、研究の仕上げをおこなう科目である。

【履修モデル】

4年間の学修の**道標**として、つぎのような履修モデルを参照するのもよいだろう。なお、当然ながら、どのモデルの場合にも、学科の卒業に必要な最小限の単位は科目群ごとにすべて修得しなければならない（たとえば「日本文化研究」科目の10単位以上など）。そのうえで、それぞれのモデルに必要な科目を重点履修するのだと考えてほしい。

1. 文化ビジネス・モデル ～国際感覚，日本文化発信，創造性～

【趣旨】

国際社会の中で日本文化の特色を理解するとともに、日本文化を海外に向けて発信できる**国際感覚豊か**で**創造性**を持った人になる。

【将来の職業】

旅行・観光業，放送・マスコミ，出版関係，海外研修斡旋，文化イベント企画など。

【履修科目モデル】

特に次のような科目を履修するとよい。

国際文化交流学科開講科目
英語選択必修科目群から、英語日本文化演習，英語国際文化演習
日本文化研究科目群から、日本文化論，日本芸能論，日本思想史，日本文化史
国際文化研究科目群から、国際文化論，国際事情
比較文化研究科目群から、文化比較論，比較文化特論
関連科目群から、観光論，広告文化論，ジャーナリズム論，マスメディア論，出版編集実務論
教養系科目
芸術論（美術），芸術論（音楽），日本史，文学，民俗学，宗教学
法学部開講科目
国際法，憲法，家族法
経済学部開講科目
国際ビジネスコミュニケーション，消費文化論，国際ビジネス論
課外講座
旅行業務取扱主任者講座

2. 観光学モデル ～草の根レベルの国際理解の助っ人～

【趣旨】

さまざまな場面で、草の根レベルでの国際的な相互理解を手助けする**専門家**になる。

【将来の職業】

旅行代理店勤務，ホテルスタッフ，フライト・アテンダント，航空会社地上スタッフ，旅行ガイド・通訳，など。

【履修科目モデル】

特に次のような科目を履修するとよい。

国際文化交流学科開講科目
英語選択必修科目群から、英語日本文化演習、英語国際文化演習 日本文化研究科目群から、日本文化論、日本芸能論、日本民俗学、日本文化史 国際文化研究科目群から、国際文化論、国際事情 比較文化研究科目群から、文化比較論 関連科目群から、観光論、経済地理、国際経済学
教養系科目
芸術論（美術）、芸術論（音楽）、人文地理学、文化人類学、環境科学
工学部開講科目
建築史、都市デザイン論
経済学部開講科目
自然地理学、交通論、流通論、環境経済論、マーケティング
人間科学部開講科目
地理学（含地誌）
課外講座
旅行業務取扱主任者講座

3. 日本語教員モデル ～日本語を学びたい人は世界各地に～

【趣旨】

日本語教員に必要な言語学や日本語教育学の基礎知識を獲得し、言語と行動、言語と社会について分析する視点を身につける。日本語教員を目指す人は、国際文化交流学科の科目に加えて、資格課程の「日本語教員養成課程」に登録し、所定の科目を履修する必要がある。（「資格教育課程」参照）

【将来の職業】

日本語教員（国内の大学・日本語学校、海外の大学など）、地域日本語コーディネータ、JICA・国際交流基金等による海外派遣（日本語教育担当）、言語学・応用言語学系の大学院への進学。

【履修科目モデル】

特に次のような科目を履修するとよい。

国際文化交流学科開講科目
日本語教育研究科目群から、言語学概論、対照言語学、社会言語学、現代日本語学、言語習得論、日本語教育学など
教養系科目
言語学、日本語学など

4. 博物館学芸員モデル ～歴史・文化をより多くの人たちに～

【趣旨】

博物館は歴史・芸術・民俗などに関する資料を収集・保管して調査・研究をおこなうとともに、展示という手段を通して人々が歴史や文化に親しみ、関心を高めるための場を提供する社会的役割を担っている。そのため、博物館の学芸員をめざす者は、日本の歴史・文化・民俗全般に通じ、調査・研究に必要な知識と技術を習得するとともに、その成果を広く人々に訴えかけるためのノウハウを身につける必要がある。**資格教育課程履修要覧**が定める学芸員の資格取得のための**学芸員課程**に関する科目以外にも次のような科目を習得しておくことが望ましい。

【将来の職業】

博物館学芸員、大学院歴史民俗資料学研究科など歴史民俗系大学院への進学。

【履修科目モデル】

特に次のような科目を履修するとよい。（*印は「学芸員に関する科目」に含まれるもの）

国際文化交流学科開講科目
日本文化研究科目群から，日本文化論，日本芸能論*，日本思想史，日本民俗学*，日本文化史*，文化資料学，文化受容論など 関連科目群から，観光論，出版編集実務論など
教養系科目
日本史*，考古学*，民俗学*，文化人類学*，芸術論（美術）*，人文地理学など
人間科学部科目
地理学（含地誌）

5. 二言語重点モデル ～英語圏を越えて活躍～

【趣旨】

英語は国際的に最も重要な言語ではあるが，英語以外の言語が必要な場合も少なくない。英語に加えて，学科開設の地域言語（ドイツ語・フランス語・スペイン語・ロシア語・中国語・韓国語から選択）も必修の単位数を超えて学べば，より高度な語学力が養成され，英語圏以外での活躍の道も開ける。なお，国際人としての素養を高めるには，言語だけではなく，その地域の文化や歴史などの様々な知識を身に付けることも必要である。希望する進路によっては，他の履修モデルと組み合わせることも効果的である。

【将来の職業】

海外（英語圏および選択した言語の地域）に展開する商社・金融機関・製造業・サービス業，または旅行業・観光業（日本からの海外旅行に関する業種，外国からの観光客の受け入れに関する業種）

【履修科目モデル】

特に次のような科目を履修するとよい。

国際文化交流学科開講科目
英語科目群から，必修科目・選択必修科目 地域言語科目群から，入門語，応用語（いずれかの言語を選択） 国際文化研究科目群から，選択した言語の地域に関連する国際文化論，国際事情など 比較文化研究科目群から，文化比較論など 関連科目群から，地域言語特講語
外国語科目
語上級，語中級
教養系科目・他学部他学科科目
選択した言語の地域に関連する科目

6. 国際英語モデル ～英語を武器に世界で活躍～

【趣旨】

現在，英語は国際的に最も重要な言語であり，英語の高度なスキルおよび関連した文化知識などはこれからの世界で活躍していくためには必須である。グローバル・コミュニケーションツールとしての英語のスキル，ならびに世界の諸地域の文化を理解する能力を身に付けることを目標とする。

【将来の就職先】

積極的に海外展開をしている・あるいはこれからしようとしている企業や，外資系企業の日本支社

【履修科目モデル】

学科科目からは，特に以下の表にある英語系科目・国際文化研究科目や，授業をすべて英語で行う「オール・イングリッシュ」科目の履修を推奨する（個々の授業に関してはシラバスで確認すること）。また，必修/選択必修枠で定められたもの以外でより多く英語を履修したければ，「外国語科目」の英語科目（中級以上）を選択することができる。さらに授業外活動として，外国語学部が主催する「海外企業研修」に参加するのも，見聞を広める好機となるであろう。

国際文化交流学科開講科目
英語国際文化演習，英語海外研修，国際事情，国際社会論など オール・イングリッシュ科目（比較文化概論，比較文化特論，比較日本文学，比較日本文化）
外国語科目
英語の中級以上の科目
教養系科目
海外インターンシップなど

【その他の注意事項】

1. 本学科を卒業するためには合計128単位以上の修得が必要だが、科目群ごとに最小限の履修単位が定められているので、卒業要件一覧表をよく参照すること。
2. 2年次から3年次へ進級するためには、FYS 2単位、国際文化交流基礎演習 2単位、英語10単位以上をふくめて、60単位以上を修得しなければならないので注意すること。
3. 「外国語科目」としては英語を必修としている。学科専攻科目としての英語とあわせ、総体として28単位の英語を学ぶのだと理解すること。
4. TOEICを3回学内で受験することになっている。その成績によって6単位まで認定される制度もあるので、積極的にチャレンジすること（「各種検定合格者の単位認定に関する規程」参照）。
5. TOEICのほかにも、TOEFL、実用英語技能検定、実用フランス語技能検定、ドイツ語技能検定、DELE：スペイン語技能検定、スペイン語技能検定、ハングル能力検定、漢語水平考試などの単位認定制度がある。（「各種検定合格者の単位認定に関する規程」参照）。
6. 本学が推薦する海外研修制度の所定プログラム（「海外語学研修」）を終了した場合には、6単位まで単位が認定される制度があるので、積極的に利用してほしい（**海外語学研修の単位認定に関する取扱規程**参照）。
7. 英語の教職課程を履修する場合、「教科に関する科目」は英語英文学科の開講科目を履修することになるが、20単位を上限として、国際文化交流学科の関連科目に算入できる。

以上

国際文化交流学科

Department of Cross-Cultural Studies

異文化理解力と日本文化発信力

- 世界各地の文化と現状を幅広く学んで、「国際文化」についての知識と理解力を身に付ける。
 - 日本文化の多様な側面を深く学んで、「日本文化」の知識と理解力を身に付ける。
 - 異文化の詳細な比較によって、文化背景の異なる人と交流する際の問題点を認識するための「比較文化」の知識と理解力を身に付ける。
- これらを通して得る知識を一連の演習科目で統合し、「国際文化交流力」を身に付ける。

アカデミックスキルと専門知識の統合力

適切な文献を探して理解し、それらをまとめて発信する力を身に付ける。年次が上がるごとに専門性を高めていく。

英語力

文化の発信と交流に不可欠な伝達手段のなかでもとりわけ重要な英語力を身に付ける。上述の「国際文化交流力」の重要な一翼を担う。

地域言語力

英語は国際的に最も重要な言語ではあるが、英語以外の言語が必要な場合も少なくない。ドイツ語・フランス語・スペイン語・ロシア語・中国語・韓国語から選択して学ぶ。「国際文化交流力」の一翼を担う。

学修の裾野を広げる

知識・視野の拡大に役立つ広告文化論、出版編集実務論、フィールドワーク入門・観光論のような実践科目を学んで学修の裾野を広げる。

